



多様性を認め、他者を支援できるマインドを 習志野共通科目「人間と生命」今年も開催

9月12日(木)・13日(金)の2日間にわたり、習志野キャンパス共通科目の「人間と生命」が開催された。これは薬学部、理学部、健康科学部の1年生が合同参加した科目で、2017年に健康科学部が新設されたのを機に検討され、2018年からスタートした。

障がい者や高齢者の不自由さを 疑似体験して支援の必要性を実感

学生がペアになり、1人が車椅子に乗り、もう1人がそれを押す。その向こうではアイマスクをつけた1人に、もう1人が手を貸して歩く。これは障がい者体験の様子だ。

今年の「人間と生命」に参加した学生は、薬学部30名、理学部26名、健康科学部6名の計62名。初日の12日午前には、講義室で理学部生命圏環境科学科 朝倉暁生教授の指導のもと、人間の多様性や命を大切にすることについて学生同士で議論を重ねるグループワークが行われた。

続く障がい者体験では、特定非営利活動法人日本アビリティーズ協会のスタッフによる指導で、スポーツアリーナを会場にA、B、Cの3グループに分かれ、車椅子の体験、視覚障がい者や高齢者の疑似体験に取り組んだ。

車椅子の体験では、段差の越え方、スロープの上り下りの仕方など安全な使用方法を学習。視覚障がい者の疑似体験では、アイマスクをつけた状態で階段の上り下りも行った。高齢者の疑似体験

では、関節が曲がりにくくなるなど高齢期の身体を実感できるシミュレーターを装着。目には白内障が体験できる視覚シミュレーターをつけての歩行に取り組んだ。

私たちが見ている世界と 障がい者が見ている世界は違う

障がい者体験の後は、日本アビリティーズ協会の松尾敬徳理事・事務局長による「ご高齢の方・障がいのある方の特性と対応について」の講演が行われた。松尾理事は高校2年生のときにバイクの事故に遭って以来、車椅子で生活している。

松尾理事は、講演を前にして学生たちにこの日の障がい者体験の感想を聞いた。
「白内障の疑似体験では視界も色もぼやけて、高齢者の方の大変さを実感できました」
と述べた学生に対して松尾理事は次のように語った。

「レジでお金を出せなくて困っている高齢者の後ろで、若い人がいらだたってばかりレジに回る。こんな光景を皆さんも見たことがあるでしょう。視力が弱くなったご高齢の方は財布の中の硬貨が10円なのか100円なのか、紙幣が千円札なのか1万円札なのかよく見えないのです」
ほかの学生の「目が不自由だと階段が何段あるのかわからず不安でした」「視力を奪われてしまうと、普段歩き慣れた道さえ怖く感じました。初めて歩く道はもっと恐いはずです」という声に対

建学の精神 「自然・人間・生命」を体感し より理解を深めるために

翌日は救命救急実習が行われた。日本赤十字社の指導のもと、学生たちはケガや病気で倒れた人に対する心肺蘇生法やAED(自動体外式除細動器)を使った二次救命処置の方法を学んだ。

「人間と生命」を担当する理学部教養科の千葉康樹教授はこの科目について次のように解説する。「東邦大学の建学の精神は「自然・生命・人間」です。「人間と生命」という教科名には建学の理念を表す3つの言葉のうち「人間」と「生命」の2つが入っています。建学の精神を体感して理解を深め、他者を支援できる人間になってほしいという願いが込められているのです。また、大学に入学したばかりの時期に他学部の学生と交流の機

会を持ち、切磋琢磨してもらうことも目的です。

1日目のグループワークのテーマは「多様性」でした。病気や障がいのある方々などさまざまな人々が暮らす社会の一員として、自分を認めつつ、他者も認めて生きていくことの大切さを考えることから「人間と生命」はスタートするのです。そして実習に移ります。救命救急講習では、周囲の人に大きな声で指示を出したり、人形を使って強い力で心臓マッサージをしたりと、真剣そのものの実習が長時間続きます。座学だけでなく実習を導入したことで、困っている人を前にしたとき、すぐに行動できるマインドが学生たちに芽生えたのではないかと期待しています」

2日間の日程を終えた学生たちは、このプログラムを通して「人間と生命」について理解を深めたのではないだろうか。



日本アビリティーズ協会 松尾敬徳理事・事務局長による「ご高齢の方・障がいのある方の特性と対応について」の講演



車椅子体験。段差の越え方、スロープの上り下りの仕方などを学習



視覚障がい者の疑似体験。アイマスクをつけた状態で階段の上り下りを体験



高齢者の疑似体験。視覚シミュレーターをつけて財布からお金を出そうとするがスムーズにいかないことを実感



障がい者体験の感想を述べる学生



高齢者の疑似体験。シミュレーターを装着し、目には白内障が体験できる視覚シミュレーターをつけての歩行